

## 社中交歓 萬來舎内「萬來舎文庫」について

ねぎし ともこ  
根岸 智子

(三田メディアセンター)

150年記念事業の一環として建て替えが進められた南校舎が、工事を終え、2011年4月に新しい姿に生まれ変わった。200人収容できる大教室や、グループ学習室、見晴らしの良いテラスなどを備えつつ、学生へのサービスを担当する事務室の集約化を図るなど、学生にとってより効果的な支援が行えるように工夫がなされている。そしてこの南校舎竣工に伴い、長年の念願であった、塾員（卒業生）や教職員のための交流スペース『社中交歓 萬來舎』がオープンした。



従来三田キャンパスには、母校をふらりと尋ね、ゆったり過ごしたり、一同が会せるような場が乏しかった。多くの卒業生を輩出し、塾員の繋がりや結束を誇る義塾にとって念願であったと言えよう。

そもそも、「萬來舎」は明治11年9月塾内に設けられた。その前年にできた三田演説館に隣接して建てられた木造平屋の建物で、教職員、塾生、塾員たちのための一種の社交クラブであった。「萬來舎」については、同年12月に義塾で刊行された啓蒙雑誌『家庭叢談』の「萬來舎の記」と題する一文に以下のように掲載されている。

「舎（しゃ）を萬來（ばんらい）と名（なづ）けたるは衆客（しゅうきゃく）の來遊（らいゆう）に備（そな）ふればなり。既に客と云えば主（あるじ）あるべきが、先ず来るの客を主とし、後れて来るの客を客とす。早く帰るの客は客にして、後れて留るの客は主（あるじ）なり。去るに送らず、来るに迎へず、議論なすべし談話妨げず、囲碁対棋読書作文唯客の好む所、危坐箕踞（きざききよ）共によし、扼

腕拱手両（やくわんこうしゅふた）つながり問はず、来る者は拒まず、去る者は留めず、興あらば居（お）れ興尽（つ）きなば去れ、去て客尽くれば明朝の客來を待つ。嗚呼（ああ）世も亦此舎の如し。須（すべか）らく楽て其日を長ふせよ。穴賢（あなかしこ）々々」。

筆者は福澤諭吉の生涯の補佐役であった小幡篤次郎である。この一文は、『社中交歓 萬來舎』にも掲げられている。



『社中交歓 萬來舎』がオープンするにあたり、慶應連合三田会会長 服部禮次郎氏からのご厚意により数多くの調度品が寄贈された。重厚感を醸し出しつつ、日常の憂さからしばし離れ、リラックスできる柔らかく温かな雰囲気包まれている。そして寄贈に際し服部氏よりリクエストが寄せられた。それは、塾員がふらりと学び舎を訪れ、気軽に本を手に取り、読書が出来るようなスペースを「萬來舎」に作って欲しいというささやかなものであった。そしてそのリクエストの実現は、三田メディアセンターに任されたのである。

服部氏の要望どおりの「萬來舎文庫」をどのように作り上げていくべきか、話し合いや検討を重ねた結果、塾員の憩いの場を学生がサポートするスタイルにしようとした。有志の学生と共に、まずは、大まかな方針を話し合い、実際に進めていく段階でその都度見直しをしながら最終的な形を固めていくことが、「萬來舎」の精神を象徴する大きな魅力の一つではないかと考えている。

修士課程の学生に依頼したオープン時に揃える本の選定については、塾員の著作を中心に、学術的、専門的な本は避け、気軽に手に取り楽しめる軽読書を集めるよう心がけた。また本の装備、配架も学生と共に行った。塾員の著作には緑の豆ラベルを付し、慶應義塾や福澤諭吉を話題とした本を揃え、文庫内に慶應コーナーを設けた。

学生が、月に数回程度、授業の合間などに書棚の状況を確認し、書架の乱れ具合（すなわち利用の痕跡）などの報告をしてもらっている。このことで実際に本を手にとった方々の反応を感じながらフォローをしたいと思っている。

また、書棚の一角には、塾員著書の寄贈を受けられるカゴが設置されている。学術書、長編小説等を避け、寛ぎの時間に読める軽読書を寄贈受入の対象とし、塾員と共に、より一層豊かな文庫に作り上げていくことを目指している。(多くの著名人や知識人を輩出してきた義塾においては、塾員の寄贈によって蔵書が自然に増えていくだろうと甘く淡い期待を抱いている。)

新規購入 187 冊、塾内からの寄贈 53 冊、合計 240 冊でスタートしたが、さらなる豊かな文庫への成長を願っている。オープンからの不動の一番人気は、牧田幸裕著「ラーメン二郎にまなぶ経営学：大行列をつくる 26 の秘訣」である。

また、『社中交歓 萬來舎』内には、6つの展示ケースが設置されており、三田メディアセンターは展示にも携わっている。ラウンジには、現在、三田メディアセンターの所蔵する泉鏡花コレクションから、「泉鏡花の兎コレクション」が展示されている。水晶の兎の置物、水差し、ペーパーナイフなどを展示しているが、これらは今後定期的に展示替えを行い、義塾が所蔵するさまざまな貴重な作品等を紹介する予定である。



人が行き交うように、本の顔ぶれも少しずつ変わっていく。そんな『社中交歓 萬來舎』の居心地のよい空間で、コーヒーやお酒を飲みながらもよし、ゆったりとしたくつろぎの時間を過ごしなが、新しい閃きや出会いに遭遇していただけたなら、携わった人間として無上の愉悦である。

## コラム ふたつの八角塔とラウンジ

三田キャンパスにある旧図書館は、慶應義塾創立 50 年の記念に建てられたもので現在は国の重要文化財に指定されています。そしてひと際美しい佇まいで見上げる者を和ませてくれるのが、赤レンガの『八角塔』です。旧図書館のシンボルとして親しまれたその『八角塔』のちょうど真向かいにもうひとつの「八角塔」がひっそりと存在しています。

こちらは創立 125 年記念の新図書館建設の際に、旧図書館に対峙するように造られたものです。この新図書館の「八角塔」にあるラウンジは、今春より新聞や慶應関連の資料の展示コーナーに生まれ変わりました。国内外の 100 紙ほどの新聞原紙の最新版をゆったりとソファに腰かけて、あるいは大きなテーブルに広げて丹念に読むことができます。

最近は新聞を Web 上で読む人が多くなっていますが、たしかに Web 上だと検索に優れた力を発揮するので、瞬時に読みたい記事を探してくれるのが便利です。

しかし、書いたひと、刷ったひと、配達したひと、新聞バーに配架したひと、さまざまな人々の手を経た新聞原紙には微かなインクの匂いと、思いがけない記事を目にするたのしみもあるようです。パソコンを抱えた学生たちがラウンジの新聞を熱心に開いているのが目立ちます。

ふと新聞から顔を上げると、8 枚のガラスをとおして四季折々の福澤公園の木々や、美しい旧図書館の『八角塔』が古の慶應義塾を追想させてくれるかもしれません…

佐藤 裕子

